

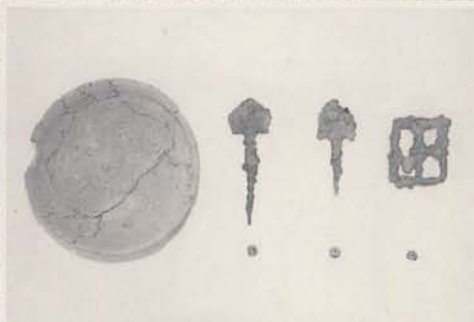
発行

財団法人東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1-14-2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No. 45

平成11年3月5日

http://www.tef.or.jp/maibun/



瀬戸岡30号墳と出土した遺物 石室はほぼ真南に開口しています。

五十年目の新知見

副主任調査研究員 松崎 元樹

あきる野市の瀬戸岡古墳群は、平井川南岸の段丘上に分布する、50基ほどからなる群集墳です。大正から昭和二十年代の調査で火葬骨を納めた土器が出土したことから、古墳時代よりも新しい奈良時代の墳墓であるとして、全国的に広く知られてきました。

ところが今年度、都道の建設に伴いこのうちの一基を発掘調査したところ、これまで考えられてきた古墳の構造や構築時期は、やや違っていることが判明しました。

この古墳の主体部は全長3.5mあまりの横穴式石室で、地表面よりも下に構築されているのが特徴です。壁はすべて自然の河原石が用いられていますが、特に奥壁は150kg以上もある石を二段積みにしており、壁の周囲には裏込めの礫が緻密に施されています。耕作により天井石は失われていますが、床は全面に平らな石を敷き詰めて構築されていました。

ところで、石室南端の石積みへの仕方が気になり外したところ、地下の墓室に向かう階段状の通路が検出され、鉄製の矢じりや革帯を結ぶ金具、石製の丸玉、土師器の坏が出土しました。坏は、近隣の古墳時代後期のムラで出土する、七世紀中葉のものに酷似します。

今回の約半世紀ぶりの調査で得られた成果は、これまで謎とされてきた瀬戸岡古墳群の実態を解明する糸口になるかも知れません。

江戸トイレ事情

汐留遺跡の仙台藩伊達家の屋敷跡から、木製の「おまる」が発見されました。ご存じのようにおまるは携帯用のトイレですが、江戸の屋敷跡からこのようなものがそっくり見つかったのは、初めてのことでしょう。そこで今回は、臭い話で恐縮ですが、しばらくは鼻をつまんでお付き合いたいと思います。

文化財講座 <35>
大江戸掘りもの帖 ~ 十二 ~

江戸の遺跡を調査すると、桶や大甕が埋めこまれた遺構が検出されることとがあります。これらを当時描かれた屋敷の絵図面と照合することによって、そこがトイレであったことがわかりますが、絵図面などが無いときには、なかなかトイレと認定することはできません。

そこで登場するのが、あの検便でおなじみの寄生虫の分析です。トイレ跡と思われる遺構の土を薬品で化学処理した後、顕微鏡で観察し、人に宿る寄生虫卵がたくさん見つければ、そこがトイレ後であったこととなります。

以前、尾張藩の屋敷跡で見つかった桶のなかの土を検査したところ、わずかに1cmの土の中から千個以上も

の寄生虫卵が見つかり、話題になりました。そんなには、さぞお腹もピーピーであったろうと思いたくもなりません。

さらにこの寄生虫卵の種類を詳しく見ていくと、鞭虫卵と回虫卵が多いことがわかります。これらは、人糞肥料で汚染された野菜の摂取が主な感染経路といわれており、このことから野菜類を多く食していたことがわかり、さらにこの土の中からは、アブラナ科とキク科の花粉が多量に見つかっており、その野菜がアブラナや春菊といった野菜であったことが推測されます。またご丁寧なことに、この桶の中からはゴマの種も一



緒に見つかっていますので、春菊のゴマ和えのようなものが食卓に上っていたのでしょうか。

このように臭いトイレも、詳しく調べることで当時の食生活を見事に復元することができる、考古学的にも貴重なものなのです。

ところで江戸時代の人にとって人糞は、江戸近郊の畑にまかれる重要な肥料でもありました。特に食料事情が庶民よりも優れている大名屋敷の人糞は、「きんぱん(上等品)」とされて、高値で取引されたとされています。伊達の屋敷は、幸いにも海沿いに建てられていますので、千葉方面の農家の人が舟で購いにきていました。

伊達の屋敷跡からは、すでにこのような埋め桶が300基近くも検出されており、「世界一トイレの多い遺跡」といわれる所以です。ところで、写真のおまるですが、まだ蓋は開けておりません。新たな発見を求めて、この蓋を開ける日が来るのが楽しみです。(小菜 一夫)

展示ホールの休館

三月八日から十三日まで、展示替えのため休館になります。十四日からは、新たに「土と木と炎と——古代丘陵の生産活動」を展示します。



須恵器を焼いた窯も展示します

平成十一年度の展示に向けて

多摩ニュータウン地域には一千箇所近くの遺跡が発見されています。遺跡の多くは時代が複合しています。が、わずか400年間ほどの古代(奈良・平安時代)なのに、この時代の遺跡が、実に600箇所もあるのです。前代の古墳時代に比べてどうしてこんなに多いのか、この異常に多い遺跡の社会背景を考える必要があります。

この疑問を解く鍵は、多摩丘陵の古代遺跡の生業を見直すことにあるかと考えます。遺跡の多くは集落ですが、ほかにも窯業生産に関する遺跡や、木器生産、製鉄や鍛冶関連、さらに牧に関係するらしい遺跡が浮かびあがってきます。おそらく、豊かな丘陵の資源に着目した、公的機関の力が強く働いたようなのです。

今回の展示は、その生産活動の実態に目を向けて見ました。

遺跡だより ⑤③



多摩ニュータウンNo.939遺跡

ウンの範囲から外れるために、惜しくも中期集落の全掘には至りませんでした。検出された遺構は、住居跡40軒、竪穴状遺構1基、墓壇50基、集石遺構2基、配石遺構1基、方形柱穴列2基などがあります。

写真でも明らかのように、住居跡群は、ゆるやかな尾根状をした斜面の両側縁に配置されていて、中央部は遺構がない広場になっています。墓壇群および方形柱穴列は、住居跡群の内側で、広場と境をなす辺りに構築されています。

ところで、中期前半の住居は4本

No.939遺跡は、多摩ニュータウン遺跡群の最西部にあたる町田市小山町に所在します。多摩境駅の東側の丘陵の一角の約5万5千㎡もの広大な範囲ですが、平成三年度からの多年にわたる調査で、そのうちの約4万㎡は、既に調査を終えています。

今年度は、南向きに張り出す約7千㎡の斜面を、平成十年八月から調査してきました。このほど縄文中期集落の調査がほぼ終了したことから、平成五・六年度に調査した斜面上方分（写真の右側）を含めて、その概要を紹介しようと思えます。なお集落の辺りは標高が約160mで、ここからは相模野台地をはじめ丹沢山系から富士山をも一望にします。パノラマ景観を楽しむことができます。

斜面下方（写真左側）がニュータ



柱で規模が小さく、炉形態は埋甕炉であるのに対して、中期後半の住居は5本柱で規模が大きく、炉形態は石囲炉が一般的です。住居跡群はまた幾つかのまとまりからなり、その

保存科学室「ほれ話」(九)

赤色顔料について(3)

前回までは酸化鉄が母材の赤色顔料でしたが、今回は、No.72遺跡で出土した水銀朱の例を紹介します。

No.72遺跡は、ニ

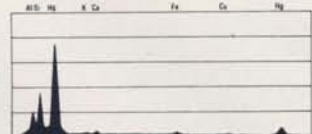
ータウン地域で最大の縄文中期の集落です。その集落東側の環状住居跡群の内側に位置する、第26号住居跡（中期終末の敷石住居）炉の直上から出土した磨石（図）に赤色物質が附着していました。

そしてこの赤色物質を分析したところ、水銀朱であることが判明しました。

担当職員によれば、石器の石材は暗灰色をした扁平な砂岩の円礫で、赤色物質は石器に塗布されたのではなく、



水銀朱の平面分析 (×1500) 水銀朱の断面分析



水銀朱のX線分析スペクトル



第26号住居跡出土の磨石

まとまりの単位ごとに墓壇群が付随しているようです。この住居跡群と墓壇群のまとまりは、家族単位の関係で捉えられるのかも知れません。（川崎 邦彦）

顔料を磨り潰すなど精製したときに附着したのであろうということですが。水銀朱が使用されるようになるのは縄文後期以降のことであり、それだけに、本資料の出現は、何処でどのように入手して遺跡にもたらされたものか、ここで精

製された水銀朱が何に使用されたのかなど、問題を提起したものとはいえるでしょう。

また同じく第96号住居跡（中期後半）からも、同じ素材と形態の磨石が出土していて、赤色物質の附着が認められ、こちらは酸化鉄が母材のベンガラでした。縄文人が赤色物質を使用している生活環境が、少しずつ解

（上條 朝宏）

文化財講演会の記録

今年度の展示に因んだ第四回目の講演会として、十一月七日(土)に、国学院大学特別研究員の山本典幸氏による「狩猟採集民の季節の住まい」の講演と、映画「海の恵みと日本人」を上映しました。参加者は90名を数えました。

同じく第五回目として、一月二十三日(土)に、東京都教育委員会学芸員の福田健司氏による「古代末期の住まいとくらし——落川遺跡の調



山本典幸氏の講演



福田健司氏の講演

査から」の講演と、映画「稲荷塚古墳」を上映しました。参加者は103名を数えました。

最終の第六回目として、二月十三日(土)に、当センターの飯塚武司副主任調査研究員による「原始古代の木製容器——木器づくりのムラ」の講演と、映画「うつわ——食器の文化」を上映しました。参加者は106名を数えました。

以上、今年度6回の講演会の参加者総数は、739名に上りました。



サイモン・ケイナー氏ご夫妻

また、十一月二十六日(木)に、来日中のケンブリッジ郡考古学センターのサイモン・ケイナー氏による、「イギリスの巨石文化——ストーンヘンジ」の講演会を催しましたところ、週日にも関わらず32名が参加されました。スライドが映し出すソールズベリーの美しい光景に、参加者はすっかり魅せられました。

汐留遺跡の現地説明会

毎年恒例になりました汐留遺跡の見学会を、今回は十一月十四日(土)に開催しました。当日は天候にも恵まれ、また新聞等にも紹介記事が掲載されたため、一千五百名もの熱心な考古ファンが訪れました。

今回の見どころは、旧新橋駅関連の火力発電所や転車台など、それにこれまでに出土したいろいろな遺物類や泥メンコの型抜き、水道模型による流水実験など盛り沢山のため、暗くなるまで人の波が途切れませんでした。

No.939遺跡の現地説明会

本紙「遺跡だより」に紹介しましたNo.939遺跡ですが、地元の小山地区の方々の要望により、二月十日(水)にミニ見学会を開催しました。寒風にもめげず、87名が参加されました。

東京都遺跡調査研究発表会

第24回を迎えた今年度の発表会が、十二月六日(日)に、立川市の多摩社会教育会館で開催されました。当センターからは、五十嵐彰調査研究員が、武蔵国分寺跡遺跡北方地区の旧石器時代の成果を発表しました。

武蔵台分室の開設

多摩市東寺方の都道用地の調査終了により東寺方分室が閉鎖され、上條朝宏係長(兼務)、鶴間正昭・岩橋陽一・竹花宏之副主任調査研究員は、十二月一日に開設された、府中病院内の武蔵台分室に移りました。

東京都文化財に指定さる

二月二十二日、多摩ニュータウンNo.513遺跡出土の奈良時代の瓦類や中世の法華経巻等が指定されました。



汐留遺跡の見学風景

R100

古紙100%配合の再生紙
を使用しています。